

跡見女学校の教育と古典文学の教養

——折り手本「四季のふみ」から——

植 田 恭 代

要 旨

跡見学校ならびに跡見女学校では、学祖跡見花蔭がみずから書画を担当している。そこで用いられた習字の折り手本が、文字を習うことを通して生徒たちの人格教養を高める教材としてあることは、前稿までにも見てきたとおりである。本稿では、書簡体の本文を持つ折り手本が消息文の伝統のうえにあることをまず確認し、そのひとつである折り手本「四季のふみ」の翻字を試みる。樋口一葉によって書かれた明治二十年代後半の「通俗書簡文」をあわせて参照しながら、「四季のふみ」が、古典文学の伝統のうえにある基礎教養を反映した本文であることを明らかにする。

はじめに

跡見学校ならびに跡見女学校の教科書のなかで、学祖跡見花蹊の重んじた書道の折り手本が、師と生徒を繋ぐ重要な役割を果たしていることは、これまでも見てきたとおりである。⁽¹⁾ 折り手本は、単に文字の手本であるにとどまらず、女性の人格教養にも奉仕する教材として配慮され用いられていた。日本文化を重んじた跡見学校ならびに跡見女学校では、『源氏物語』による本文や、『古事記』『日本書紀』などに由来する神話を取り入れた折り手本が用いられており、それが単に知識教養の獲得のみならず、女性の人格教養にいかされるような本文として採用されていた。こうした、書道の折り手本の本文をさらに検討してみるとところから、跡見学校ならびに跡見女学校の教育のあり方をうかがうことができよう。本稿では、その一端として、前稿で一部ふれ、十分に検討するには至らなかった消息文の折り手本の場合から、改めて考察してみることにする。⁽²⁾

なお、開校時の名称は「跡見学校」であるが、明治のうちにほどなく「跡見女学校」と改称されているようであり、本稿でも前稿までと同様、便宜上「跡見女学校」の名称を用いて進めてゆくことにする。⁽³⁾

一、消息文の折り手本

跡見学校ならびに跡見女学校の書道の折り手本の内容は多岐にわたるが、そのうち、仮名を中心とする本文のなかに、手紙文を本文とする折

り手本がみられ、⁽⁴⁾ これらのうち「四季のふみ」について前稿でその一端にふれた。『汲泉』八十四号に掲載された卒業生の文章によれば、「四季のふみ」は、初級の折り手本として用いられたものである。『汲泉』が卒業生に対して呼びかけた「校友諸姉の御消息」の、「在校生の想ひ出」という項目に対する「みずゝ会」⁽⁵⁾ 複本光栄氏の文章をあげてみる。

それは、入学後初ての御細字の時間、あの「四季の文」の春を頂戴した時で御座いました。師の君は御手本を開かれながら、「この仮名文字は唯徒に優しいのみではありません。優しい中にもしつかりとした筆法ではありませんか。女子は従順にして、且内に凜乎たる意志を持つ可き事が示されてあるのです」と御訓し下さったのです。私はこの御手本、この御言葉を通じて、跡見心の神髄に触れた思が致し、実に私⁽⁶⁾の胸に気高い校風が培はれはじめた、第一印象として忘れがたいので御座居ます。

「四季の文」は入学後まもなく渡された手本であり、初級用の仮名の手本であることがわかる。折り手本を開き、そこに書かれた文字を通して、女性としての生き方を伝える師の君の教えに「跡見心の神髄」を感じ取り、自分のなかに根づき始めた感動を綴った文章である。「四季の文」の仮名文字が、「唯徒に優しいのみではありません。優しい中にもしつかりとした筆法ではありませんか。女子は従順にして、且内に凜乎たる意志を持つ可き事が示されてあるのです」という教えを導くものとして使用されている。花蹊の書は力強い筆跡が特徴であり、女性であってもなよやかな線ではなく重厚な書を教えたことが知られるが、仮名文字に

おいても「しっかりとした」筆法をよいとし、それが女性の理想的な生き方に反映されている。「女子は従順にして」の一節には時代の意識の反映が感じられるものの、優しさのなかのしっかりとした筆法を、凜乎たる意志を持つことに重ね合わせて解釈しているのであり、折り手本は習字の手本であると同時に、女性の生き方を説く教材となっていたことがうかがわれるのである。

「凜乎たる意志を持つべきこと」は、跡見女学校の一貫した教えであつたようである。昭和九年五月の跡見女学校六十周年記念式の祝辞で、吉岡弥生が跡見花蹊について「さうして非常に日本女子の婦徳を涵養して居らつしやいまして、表面矢張り日本女子でございますが、内心は非常に強く、これは花蹊先生の御人格でございますが、生徒をして表面は淑かに、本当の女子のやうにして、内面は確に強く生きると云ふやうに御教へになつたやうに思はれます。」と述べている。⁶⁾吉岡弥生は、跡見女学校の卒業生ではないが一時在学している。すでに医学校を卒業し開業したのち、明治二十八年に二十五歳で再び上京し跡見女学校に入学したと同じ祝辞のなかで述べており、これは明治二十年代後半の花蹊の教えを回想したものである。その当時であつて、すでに女子が「内面は強く生きる」ことを説いていたことがうかがえる。こうした花蹊の教えを具体的に表すひとつの教材としても、仮名を中心とした折り手本が用いられていたと考えられる。

跡見女学校の折り手本は、ただ文字の習得のためだけにあるものではない。文字筆法が生き方の模範に利用されるとともに、その本文も女子

の教養を高めるために配慮されている。ここでは、入学間もない生徒たちに使用された消息文の本文が、どのような文章であるのかを、あらためて検討してみることにする。

二、消息文の歴史のなかで

「四季のふみ」の本文は、仮名で書かれた消息文例である。こうした消息文例は、近代に入つて作られたものではない。手紙は「文」「消息」等と呼ばれ、長い歴史を持つ伝達の重要な手段である。現代のような情報社会では、伝達の手段が多岐にわたり、手紙はそのなかのひとつにすぎない。日常生活においては、最も頻繁に使用される電話やメールがあり、携帯電話の急速な普及によつて、それがより身近な個人と個人を繋ぐ伝達手段になりつつある。しかし、現代にあつても、改まった折や正式な場では書状を用いることが多く、手紙は重視される。まして、手紙が伝達の唯一の手段と言つても過言ではない時代であれば、手紙の担う意味あいの重さは現代社会とはまったく違う。したがつて、相手の心に訴える有効な本文であることが重要であり、よりよい文例がもとめられることになる。

手紙の歴史的変遷については、小松茂美『手紙の歴史』に詳しい。そのなかで手紙の文例についてもふれており、「奈良時代から平安時代にかけて、貴族たちは、もっぱら、舶来の書儀にならない、日本人の手による範例文は編まれなかつた」という。⁷⁾日本人による手紙の範例文の早いものは、平安時代末の成立かとされる藤原明衡の『明衡往来』である。

明衡（九八九〜一〇六六）は『本朝文粹』の著者で、文章博士・大学頭となり、『明衡往来』には『雲州消息』『雲集往来』の名もある。これは漢文体で記された手紙の模範文例で上中下巻からなり、さらにそれぞれを本と末とし、正月から十二月まで四季に見合った内容となっている。往復書簡のスタイルである。

その後、このような手紙の文例集はしばしば作られる。その一端をあげれば、中山忠親『貴嶺問答』は質疑応答のかたちをとった往復書簡文であり、『十二月往来』と、それにつぐ京極良経『新十二月往来』は四季十二月ごとの消息文である。これらは、男性の手になる書状である。一方、手紙の形式や作法を説く書があり、守覚法親王の『消息耳底秘抄』は片仮名混じり文で、そのなかには「女房許へノ消息事」という女性宛の消息の心得を説いた記述がみられ、慣例的な規定を記す、群書類従所収の『書札札』には、「遣二女房許一状」の項がある。

女子用の消息文例集がみられるのは、往来物と呼ばれる初等教育の教科書のなかである。平安時代末の『明衡往来』から、時代が下るにつれて、消息文例から教科書としての意味あいが強くなってくる。江戸時代になると、町人たちに向けた往来物が多く出されるようになる。小松氏は往来物についての一覧を作成し⁽⁸⁾、それをⅠ往来・手本類、Ⅱ石摺・筆道書類、Ⅲ女書の三つに分類しており、Ⅲが女性用の文例集にあたる。往来物についての研究の集大成は、石川謙氏石川松太郎氏父子によってなされている。石川松太郎氏はその研究を収めた『往来物大系』（大空社 一九九四年）の「発刊にあたり」の冒頭で、次のように解説して

いる⁽⁹⁾。

往来物というのは、もともと往返一対の手紙模範文・模型文をいくつも集めて手本の形に仕立てたもので、平安時代の後期、十一世紀の後半に成立した。そのうち中世を通して次第に普及していくなかで、手紙文体によらない記事文体でも、手本なら「往来物」と名のりもし、呼ばれるようになった。降って近世になると、産業の発達により庶民層の間で文字の読み書きへの要望が広範に興り、家庭や寺子屋での学習に役立つさまざまな初歩教材・初歩教科書が作られ流布するようになった。そして、これらの教材・教科書のすべてが往来物の範疇に組み入れられ、近代直前には、国民の教育意識のうちに往来物＝教科書の図式が成り立ち、近代初頭の教科書に深く広い影響を遺しているのである。

女子用の往来物の内容の分類も、石川氏父子によっておこなわれている。石川謙氏がその編纂目的から、一、教訓型、二、消息科、三、社会科、四、知育科に分類され⁽¹⁰⁾、さらにそれを石川松太郎氏が増補し、次の五つに分類し直している⁽¹¹⁾。

女子用往来物系譜

- 第一 教訓型
- 第二 消息型
- 第三 社会型
- 第四 知育型
- 一、地理系

二、産業系

第五 合本型

これらは、いずれも文字の上達ばかりではなく、文字の練習を通して知育を授ける目的のもとに編まれたものであることは、石川謙氏も述べているとおりである。⁽¹²⁾ いま、問題としている手紙の文例は、この第二消息型に分類されるものの系統に入る。

明治に入ると、樋口一葉がこうした消息文の文例集を出している。

『通俗書簡文』である。「通俗書簡文」は、「新年の部」「春の部」「夏の部」「秋の部」「冬の部」「雑の部」「唯いささか」に分かれ、その書き送る手紙とその返事の手紙を載せる。⁽¹³⁾ これは、実際に誰かに書き送られたものではない。「通俗書簡文」については、『樋口一葉全集』の補注に詳しく、いま、それによれば、「通俗書簡文」は、明治二十八年から二十九年にかけて博文館が企画した、教養シリーズ『日曜百科全書』の第十二編に掲載された書簡の文範である。「執筆にいつ頃着手したかは、詳らかでない。ただ、未定稿資料の形態や筆蹟から見ても、少なくとも「冬之部」以下は、闘病中に書かれた事がわかる」と述べられており、一葉晩年の作である。

明治の時代にこうした手紙の文例集が出回るのは、それが日常生活に必要とされたからであろう。伝統を受け継ぎながら、新時代の女性作家によって新たに創作されたものである。

平安時代半ばの『明衡往来』以来、中世近世の時代のなかで往来物の性格は一部変容しながら、脈々と受け継がれた手紙の文例の歴史があり、

伝統が築かれている。跡見女学校の手紙文の折り手本は、そうした手紙文の伝統のなかにある。

三、折り手本「四季のふみ」

今度は、跡見女学校の折り手本「四季のふみ」について検討してみたい。跡見学園女子大学花蹊資料館には、現在「四季のふみ たる」「四季のふみ あき」が所蔵されており、それぞれ季節に見合った消息文の文例である。御許可を賜り翻字した、それぞれの全文を次に載せる。

「四季のふみ たる」は、縦二十四・三センチ、横七・八センチ、薄茶色の表紙に縦十三センチ、横二・八センチの白の題箋が貼られている（写真1）。消息の題名を記し、続けて仮名を中心とした本文があり、「新年のふみ」（写真2）「梅見にさそふ文」（写真3）「出産を祝ふ文」（写真4）と続く。「梅見にさそふ文」には「へんし」（返事）もある。三つの消息文はいずれも「あなかしこ」と結び、全体の末尾に「花蹊女史書」と記す（写真5）。

四季のふみ たる

新年のふみ

あら玉のとしたつ

けふの御ことほき幾

ちよかけて聞え参らす

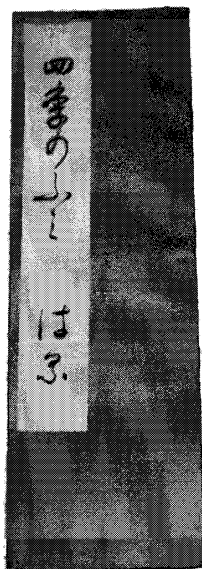


写真1

過ぎにし年は何

くれとひとかたならぬ

御なさけのもとに

こそ過し侍りしか

今年もかはらぬ御かへり

みをねかひ申すそ

かしなほもれつる

事は春の日永に

来りてこそあなかしこ

梅見にさそふ文

きのふけふの暖さに

や、春こゝちにもなり

はへりしかなかねて

聞えまゐらせつる何

かし寺の梅いまを

盛りとこそ承り侍れ

いかおほし立たせ

給はずや事ははやき

こそよけれ明日の

日曜にとそ心かまへ

はへるあなかしこ

へんし

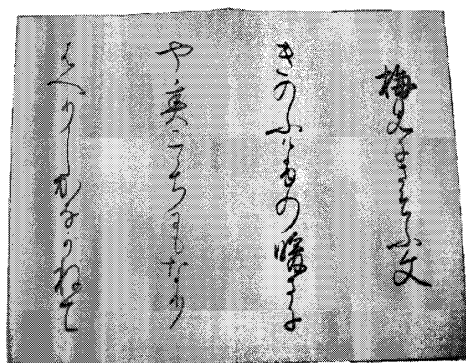


写真3

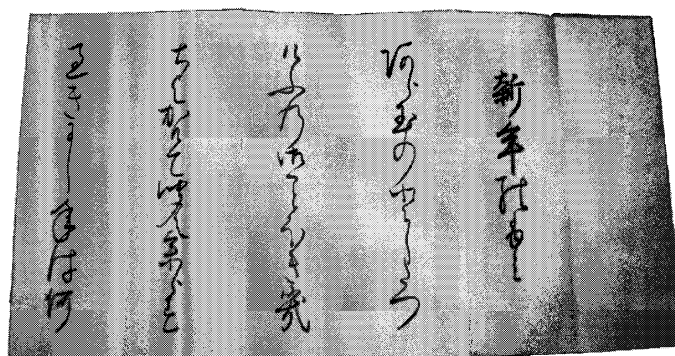


写真2

うけ給はりぬ明日は

なにかし寺の梅見に

いさとのたまふ事は

としたちかへるあし

たよりまたれし鳥の

声ならていともく嬉

しうなむよろつは朝

日つくらんきほひ玉

のとほそをたゝき参らせ

てこそあなかしこ

出産を祝ふ文

松ふく風のほのかに

承れは御うふやの事

いと平らかに奉らせ給

ひぬその蓬かしまに

すむらん鳥の子の行

末遠く祝ひまゐらす

さては一時もはやく

そのゑみ給ふらむ御

かほはせの見まゐらせ

たうこそこの鯉節

一台友禅縮緬一まさ

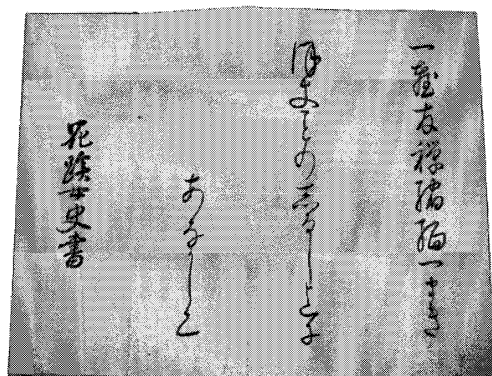


写真5

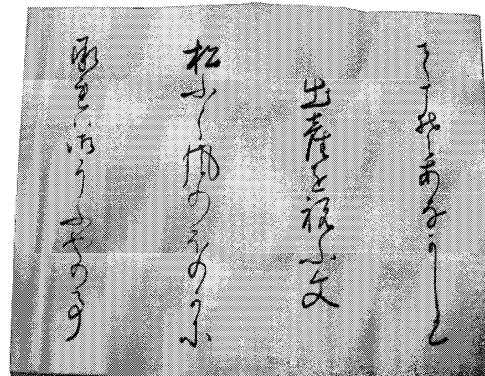


写真4

ほきことしのしるし迄に

あなかしこ

花蹊女史書

一方、「四季のふみ あき」は、縦二十四・四センチ、横七・八センチ、表紙には表裏とも桐材を用い、表には上に白の題箋縦十三・七センチ、横二・七センチが貼られている(写真6)。題を記し、仮名を中心とした本文が続くのは同様で、こちらは「月見に招く文」のみで(写真7)、その「返事」があり、「あなかしこ」と結ぶ。裏表紙には「石和田満智子」と直に書かれており、この折り手本を所持し使用した生徒の名であると考えられる(写真8)。

四季のふみ あき

月見に招く文

二千里の外迄とかや

いにしへひとも歌ひ侍

りけむ今宵の月は

広やかにせき入れ給

ひし御庭のなかれに

浮へつゝもてあそひ

給はんは似るものな

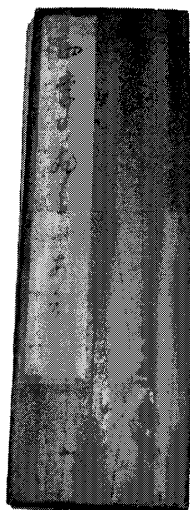


写真6

くもおはしまさめと

砧の音を隣にて小

田ちかう雁きくあ

たりはた珍らかなる

御心地はせさせ給ふへ

し夕暮の鐘をしる

へに集まらむと契

りおきし友みたり

よたりなむ侍る御遊

ひかたきにはなし

ならずともゆかしき

御琴の音も承らま

ほしうてなむ同じ

みこゝろにおはしま

さはへたてぬまと

居にいかてく

返事

人の来りて御ふみ

なりといふにとる手も

おそしと拝し参ら

すれはあな嬉し

今宵の御まとゐに

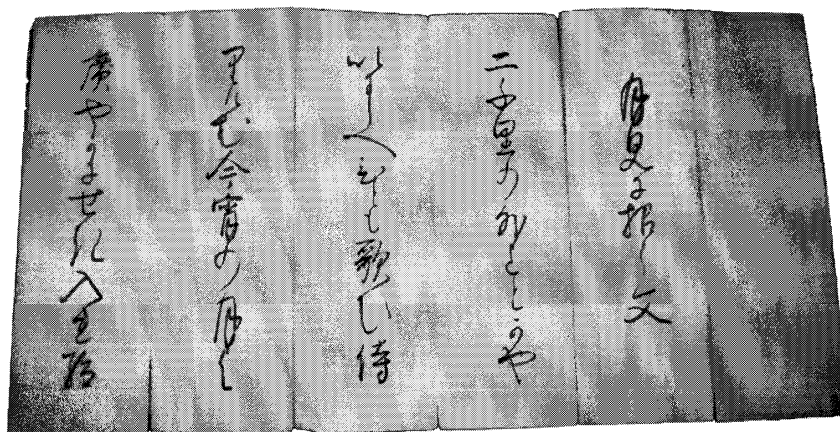


写真7

加はれとの御言の
 葉はみその、菘に
 おく露のいかに
 さらくしき御む
 しろならむと拙なき
 身にはあとしさり
 せらるゝ心地し侍
 れはもとより好む
 道にしはへれはかく
 れてのみも文あら
 てなん夕くれには
 かならず参るへし
 た、弾きもとゝのへ
 ぬしらへのみはゆる
 させ給へあなかしこ



写真8

「あらたまのとしたつけふ」「松ふく風」「二千里の外迄とかや」など、
 出だしから和歌や漢詩に由来する流麗な表現を用いた雅文調の本文であ
 る。「梅見にさそふ文」「月見に招く文」はそれぞれ「かへし」「返事」
 を載せ、「月見に招く文」の往信以外はみな「あなかしこ」で結ぶ本文
 である。

この本文の作者や成立時期は不明である。後世の学外資料の記述には、

本学園校歌の作詞者でもある大和田建樹が、花蹊の依頼で四季習字帖の
 消息文を綴ったことがみられ、学内で折り手本の撰文がなされた可能性
 もある。ただし、現段階ではこの記述の拠り所となる第一次資料を確認
 することができないため、断定することは難しい。学内資料の『汲泉』
 「回顧四十年史」によれば、大和田は明治四十三年十月没、その年の三
 月に跡見女学校を辞任したという記述を確認でき、大和田の手になる撰
 文ならば、明治期の柳町時代の成立となる。

同窓会誌『汲泉』にみられる明治二十年前後に跡見女学校で教鞭を
 とった教員には、大和田のみならず、国学者や歌人が名を連ねている。
 学内での撰文も可能であり、こうした本文を折り手本に採用する志向が
 学内に強くあつたことが推測される。

四、折り手本と古典文学の教養

女性用消息文例を本文とする手本は、前々節でふれた往来物にある。
 石川謙氏が「消息科」に分類し「習字と作文との手本として用ひると共
 に、社交上の礼儀様式を併せ教へるために編纂せられたもの」とされ、
 のちに石川松太郎氏が「消息型」とその名称を改められたものである。

『女用文章』『女筆往来』『難波津』『女庭訓御所文庫』『女中文章鑑』
 『女文庫高詩絵』『女文林宝袋』『御阿用文色紙染』などがあり、『女用
 文章糸車』『女教文章鑑』など四季折々の手紙の文例とその返事を収め
 たものもある。跡見女学校の折り手本も、基本的なスタイルは、独自に
 創造されたものではなく、往来物以来の伝統のうえにたち、女性用の消

息文例とその返事のスタイルをとっている。伝統の枠組みによるだけに、その撰文や表現に独自の工夫がみられることにもなる。

明治期の女性用消息文例として知られるのは、前述の樋口一葉の「通俗書簡文」である。「……の文」と「同じ返事」という基本的なスタイルは、跡見女学校の折り手本も共通するもので、季節ごとを中心とした、書き送る手紙とその返事の文例を載せるものである。やはり往来物の枠組みによりながら、しかし、明治初期の女性作家である一葉の独自の表現で書きおろされたものであり、それは伝統的形態と一葉という女性作家の個性の出会いのなから生まれたものである。「通俗書簡文」は明治二十九年頃の作であり、明治三十年代に流布したものであるから、それは跡見女学校の柳町時代にあたる。跡見女学校の折り手本文を考えらるうえで、参考とする価値は高い。

一葉の文例のなかには、跡見女学校の「四季のふみ」とほぼ同じ題の、「年始の文」「梅見に誘ふ文」「出産祝ひの文」「月見に人をまねく文」が収められている。それらと比較してみると、いずれも「四季のふみ」より長めの文章である。また、一葉は、往信返信ともに基本的に候文のスタイルをとっており、「通俗」の名に見あう実用の書簡文の印象が強く、末尾は「かしこ」で結ぶ。表現は雅文調である。

個々の本文をみると、「年始の文」の「御夫婦様御はじめ誰君様にも」や「梅見に誘ふ文」の「中の兄および嫂と私の三人御存じの隣の娘」「出産祝ひの文」の「御嫁御様」「御産婦様」「御両親さま」「月見に人をまねく文」の「琴の師および其道のお友だち両三人餘は伯父伯母

だつ人々に候」など具体的な人を記しており、詳細に綴られた文章である。「梅見に誘ふ文」文では「葛飾あたり」と地名を明記している。また、「出産祝ひの文」の最後に贈り物を記すのは「四季のふみ」と同じだが、一葉の方は産婦や赤子の様子を事細かにうかがう文章である。「通俗書簡文」の本文は、実態に即して具に綴る本文である。

「通俗書簡文」については、「通俗書簡文」は、博文館発行『一葉全集 前編』に「文範」と改題されて納められるまでに、すでに三十版あまりの改訂増補が行われていた。このため、再版以後は博文館の手でかなりの改訂が加えられ、原形が失われている。⁽¹⁹⁾とあり、模範文から本文の広がりが生じ、原形と違うさまざまな本文が流布していたことが知られる。また、「前述のように、この「通俗書簡文」は、極めて多くの増刷を重ね、明治三十年代の人々に愛用された。日露戦争後間もなく絶版になったのは、書簡体の文章が口語体に押されて衰微したのと、社会や家族血族集団の形態が大きく変わり始め、文範の内容が時代に適さなくなることが、原因と思われる。しかし、文学味豊かな内容は、文章の美しさとともに、捨てがたいものを残している。」⁽²⁰⁾とあり、格調高いだけに、時代の変遷のなかでは、誰でも容易に認められる本文とは言い難くなっていたと考えられる。具体的な人や地名を盛り込む「通俗」な実用書簡を認めながら、そこには一葉の古典文学の教養に裏打ちされた文筆力が滲み出ている。

たとえば、いま、「月見に人をまねく文」の全文をあげてみよう。

月見に人をまねく文

今宵の月かげいかに増り候はん浅みどりなる空の色今朝より塵ほどの雲だに見え候はぬは浅ましきまで思ひ入りて今日の晴れを願ひつるこゝろざし何處の神のうけさせ給へると空打あほぎ拜まれ申候知らせ給ごとく乙娘の末こと今年は十五に成り申候處かねく世のことわざに此とし今宵の月あきらかなれば其人一生幸運なるべしとの事舊弊なれども子をおもふ闇ゆゑははかなきことも頼まれ候て折から琴の奥ゆるしも得候へば其祝ひをかねて月見の宴いたし度ことごとくしう祝ひなど申上候てさもなき御もてなし恥かしう候へど東にむかひし二階にて唯麴酒一つ参らせたしとに御座候何も娘が身いはひとし召御入下さらば有がたかるべく参られ候は琴の師および其道のお友だち兩三人餘は伯父伯母だつ人々に候夕つかたより必ず必らずと待きこえ奉り候 かしこ

同じ返事

幾とせぶりに候はん珍しう晴れたる今日の空を御事なくとも喜び居つるに取そへ御祝ひの御宴あそばさるゝよし此ほどまで唯嬰兒さまのやうに存じたるお末様こよひの月の三五にならせ給へるをおもへばさやけき影に我が額の波かぞへても見るべく今さらながら御子たちの御成人は御すみやかなる物に御座候はやくよりお琴よく遊ばさるゝとて承り居しがいつしか御奥ゆるしにもならせ給へる事御當人はさらなり御母君の御よろこび推はかり奉り候今宵はさだめし玉ほとばしる御つま音承り得らるべくと楽しみて必らず

御席のはしにつらなり候はん今よりおもふも心ゆくやうなるはさやけき月のさしのぼらんほどその御物の音承りつゝ御二階の欄干よりとほくながめん心地に御座候お末様御運と共に光り増りぬべきことうたがひなき空と喜びて御返事はかりを かしこ

最初の「今宵の月かげいかに増り候はん」から、何か特定の出典によるというのではなく、雅文調の言い回しで始まる。「乙娘の末こと今年十五に」とあるのは、十五夜の月の連想を重ね合わせ、世のことわざにその年の十五夜が明らかであればその生涯が幸福であると述べる、趣向を凝らした文章となっている。また、同じ「子をおもふ闇ゆゑ」は、『後撰集』入集の藤原兼輔詠「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（巻十五 雑一・一一〇二 兼輔朝臣）によつて人口に膾炙した句であり、『源氏物語』をはじめ、その後の文学作品にも広くとりこまれた、子を思う親の情を表す常套表現である。

「四季のふみ」に立ち戻ると、その本文はいずれも短めの本文で、候文のスタイルを用いてはいない。具体的な相手や送る側の人々などにはふれず、「梅見にさそふ文」は「なにがし寺」とするなど、具体的な事柄を盛り込まず、ぼかした表現となっている。書道手本という性格からして、複雑な長文は採用されにくい事情が想像される。しかし、短い本文ながら、雅文調であるのは共通する。「梅見にさそふ文」「へんし」の「玉のとほそ」「出産を祝ふ文」の蓬萊山を表す「蓬かしま」||「蓬が鳥」「月見に招く文」の「砧の音」「小田ちかう雁さくあたり」など、

雅文調の古語や和歌的表現を用いた表現が随所にみられ、本文の格調を高めている。「月見に招く文」には、庭の池に浮かべる月を鑑賞する風流な趣向もある。書道の手本という制約のなかで、古典文学の教養に裏打ちされた表現を散りばめた本文である。

「通俗書簡文」のほかの出だしも、「年始の文」の「改まりぬる年の始めの御壽」、梅見に誘ふ文の「俄のおもひたちにて御都合いかならんと」、「出産祝ひの文」の「御嫁御様御こと昨夜お平らかに御産のひもとかせ給ひしよし」など、それぞれ雅文調で始まる。最初をどう切り出すかは、消息文にとって重要なことである。「四季のふみ」も、出だしに配慮された表現である。「新年のふみ」の「あらたまの」は「年」にかかる枕詞で、似た表現は『拾遺集』入集歌などによって流布した「あらたまの年立帰る朝よりまたる物はうぐひすのこゑ」(『拾遺集』巻一 春・五、『古今六帖』第一・二三、『和漢朗詠集』春 七二)にみられ、『源氏物語』初音巻の冒頭「年たちかへる朝の空のけしき」の引歌としても知られている。「あらたまの年たつけふ」は、新年を言祝ぐ古典文学の常套表現である。どれか一つの出典というより、これらの古典文学作品に由来する古典文学の教養として、後世にまで親しまれたものと考えられる。それを、折り手本の「新年のふみ」の冒頭に用いることによって、新年を言祝ぐ趣旨を、短い新年の挨拶にさりげなく的確に刻んでいる。

「出産を祝ふ文」の「松ふく風」も、勅撰集では『金葉集』『千載集』『新古今集』などからみられる、古典文学の常套的な表現である。⁽²¹⁾

どれかひとつの歌に拠るといふより、古典文学の教養の積み重ねのうえにある表現である。「通俗書簡文」に「子をおもふ闇ゆゑ」という古典文学の教養に根ざす表現がみられたが、「四季のふみ」の出だしも古典文学の教養のうえにある表現を用いている。

「月見に招く文」の「二千里の外」は『白氏文集』巻十四にある律詩「八月十五夜、禁中独直、对月憶元九」により、『和漢朗詠集』「十五夜付月」の「三五夜中新月色 二千里外故人心」によって広く知られ、『千載佳句』や、『源氏物語』須磨巻で須磨の十五夜に都に思いを馳せる光源氏の吟誦でも知られる句である。これは、時代がくだる作品のなかにも、多々引用されることで知られる。『増鏡』の「新島守」「久米のさら山」のほか、謡曲の詞章や浄瑠璃にも取り込まれ、「小督」「三井寺」「姨捨」などの詞章や浄瑠璃『国姓爺合戦』『梅檀女道行』のなどにもみられる。平安時代の日本から広く流布し愛唱され続けた句である。特定の出典によるのではなく、古来から流布し日本の古典文学や戯曲に享受された漢詩の一節を、さりげなく手紙文の冒頭に織り込むことによって、十五夜の月を愛でる心を彷彿とさせる本文である。

これらは、特定のひとつの典拠による表現というより、古典文学の教養の積み重ねのうえにある表現である。折り手本「四季のふみ」は、そうした表現を出だしに効果的に用いて、短い本文ながらその格調を高めている。

季節ごとの消息文である「四季のふみ」の本文には、基礎教養として

持つべき古典文学の教養が散りばめられている。学科目として学ぶ和漢の古典文学のほかに、伝統の厚みのうえにある古典文学の教養が、文字を習う授業の教材に生かされている。女子の生き方の模範としても扱われていた流麗な仮名の本文は、一方で、伝統の厚みのうえにある基礎教養も盛り込んだ本文である。文字を習得し、消息文の書き方を学び、その実用教材を通して、持つべき基礎教養が体得されて人格教養が高められるように配慮されていた様相を、この折り手本からうかがうことができるのである。

注

- (1) 拙稿『源氏物語』からみる跡見女学校の教育』『跡見学園女子大学文学部紀要 第37号』平成十六年三月、同「跡見女学校の教育―折り手本「道の葉」から―」『跡見学園女子大学紀要文学部 第38号』平成十七年三月。
- (2) 注(1) 前稿で跡見学園女子大学花咲資料館所蔵「道の葉」を調査させていただいた機会を得た折に、「四季のふみ」を拜見した。その時点で調査の対象ではなかったため今回改めて御高配を賜り、調査させていただく機会を得て本稿をおこなしている。一部前稿と重なる部分もある。前稿で「理事長先生御寄贈の」と書いたが、それは「道の葉」のみで、「四季のふみ」は別である。誤りをお詫び申し上げ、訂正させていただく。
- (3) 注(1) 前稿・前々稿にも記したとおり、開学当初は「跡見学校」であり、柳町時代はすでに跡見女学校であり、いつの時点で跡見女学校と改称したのかは、現在のところ不明である。
- (4) 跡見学園女子大学図書館所蔵「ゆきかひふみ」があり、『跡見開学百年』の一覧によれば学園資料編纂室所蔵の折り手本として「ふみつくし」「ゆきかひふみ」がある。

- (5) 「校友諸姉の御消息」『汲泉』昭和四年七月。『汲泉』九十一号(昭和七年十二月)掲載の跡見校友会会員名簿には「榎本光榮」とある。
- (6) 『汲泉』昭和九年七月。
- (7) 小松茂美『手紙の歴史』岩波新書 昭和五十一年。
- (8) 注(7) 文献参照。
- (9) 石川松太郎『往来物大系』大空社 平成六年。
- (10) 石川謙編『女子用往来物分類目録』大日本雄弁会講談社 昭和二十一年。
- (11) 『日本教科書大系 往来編 別巻二 続往来物系譜』(講談社 昭和五十二年)。
- (12) 注(10) 文献の「往来物から見た女子教育の理念と内容」のなかで「それのみではない、教訓科往来物は主として物読むことによつて修得の出来るやうに編まれて居り、消息科往来物の多くは手習ふことによつて学習するやうに撰ばれてゐる。読書主義と手習主義とは、江戸時代に於ける初等教育上の二大学習形式であつた。従つて往来物が、独り女子用のものの場合だけでなく広く一般に、教訓科と消息科とを軸として発達して来たことには、意義深いものがある。」と述べている。
- (13) 『樋口一葉全集 第四巻(下)』筑摩書房 平成六年。
- (14) 『近代文学研究叢書11』昭和女子大学光葉会 昭和三十四年 の大和田建樹の項。
- (15) 『回顧四十年史』『汲泉』大正四年三月。
- (16) 大塚久『跡見女学校五十年史』には、明治二十一年の「小石川移転当時の教員は、大概が神田時代の先生が、そのまゝに教鞭を執られたのである」と述べ、続いて「明治三十三年頃迄に本校に教鞭を執られた人々」として、漢文の担当に渡邊重石丸、武井義、国文(国語)担当に与謝野寛、落合直文、服部躬治、生田目経徳、大和田建樹、鈴木忠孝などをあげる。
- (17) 注(10) 文献参照。
- (18) 「通俗書簡文」の本文は注(13) 文献による。
- (19) 注(13) 文献「補注」参照。

(20) 注(13) 文献「補注」参照。

(21) たとえば、次のような歌を参考までにあげることができる。引用は『新編
国家大観』による。

わかれなむことはことにてゆくすゑのまつふくかぜをいつかきくべき
『斎宮女御集』一七〇

ことのねや松ふくかぜにかよふらんちよのためしにひきつべきかな

『金葉集』二度本 卷九 雑部上 五四一(三度本 五三四) 撰津

神山の松ふくかぜもけふよりは色はかはらでおとぞ身にしむ

『千載集』卷四 秋歌上 二三二 賀茂重政

色かへぬ松ふく風のおとはしてちるははそのもみぢなりけり

『千載集』卷五 秋歌下 三七五 藤原朝仲

ことのねにかよひそめぬる心かな松ふく風にあらぬ身なれど

『千載集』卷十一 恋歌一 六七六 二条院御製

秋きぬと松ふく風もしらせけりかならず萩のうはばならねど

『新古今集』第四 秋歌上 三〇六

これらのいずれか一首ということではなく、こうした歌群の築く伝統のう
えにある古典文学の教養が、跡見女学校の折り手本の本文に反映している
のである。

附記

本稿の執筆にあたり、学園当局の格別な御高配を賜った。資料閲覧に際し、
跡見学園女子大学花蹊記念資料館のお世話になり、資料の読み方について、
氣多恵子氏の御教示を賜った。心より感謝申し上げる。